

## はじめに

情報メディアセンター副所長

龍 昌治

小学校や中学校などの情報機器活用には、二つの側面がある。

一つは、情報社会にいきる子どもたちに対して、コンピュータなどの情報機器に慣れ親しませること。もう一つは、便利な道具である情報機器を、教師と子どもたちの授業改善のためのツールとして利用しようとすることである。

小中学校の教師にとって、パソコンは仕事に欠かせない必須の道具となっている。セキュリティの懸念はあるものの、個人購入したノート PC を職員室に持ち込み、各種の校務処理や教材作成に活用されてきた。ようやく段階的に整備が進み、ほぼ全員にノート PC が支給される体制も整ってきた。あわせて、教室にプロジェクタや電子黒板を設置し、PC とつないで、授業をビジュアル化しようとする取り組みも多く見られる。教育研究集会などでも、教科にかかわらず、ICT 利用教育実践は大きな注目を集めている。

本学においては、パソコンやプロジェクタのほか、無線 LAN のアクセスポイントや高速なネットワークも順次整備されてきている。メールなどのコミュニケーションツールとしてばかりではなく、履修届けなどの教学事務や各種手続きに情報機器は欠かせないものとなっている。学生たちは、ノート PC や携帯電話などの情報機器を、自由自在に使いこなしている。

時間や空間の制約を越え、SNS やブログなどの新しい技術を利用した学内外とのコミュニケーションは、珍しいものではない。一方で、ワープロや表計算といったアプリケーション操作技術に、不安を持つ学生もいまだに少なくはない。自ら OS やアプリケーションを設定し、セキュリティ対策などを含めて PC を管理運用する能力も、決して十分ではない。与えられた環境に満足して使うだけでなく、自らの情報環境は自ら構築する能力と気概を持ちたい。この能力こそが社会の求めるシステムアドミニストレータの出発点である。小中学校からの積み上げにより、単なる機器操作ではなく、情報を活用する本当の意味での情報リテラシが必要になってきているといえよう。

情報メディアセンターの機関紙である本誌では、今号より原稿募集や掲載の体裁を若干変更した。整備が進む高度な情報基盤を有効に活用するには、実践事例や失敗事例を公開し、互いに情報交換するのが近道である。先進的な情報技術の研究成果に加え、日常的な教育研究ツールとしての情報メディア活用事例の報告を期待している。